

# なかま

プリンスン日本語学校  
平成27年度 No.40  
平成28年2月28日  
文責 荒川雄之 arakawa@pcjls.org

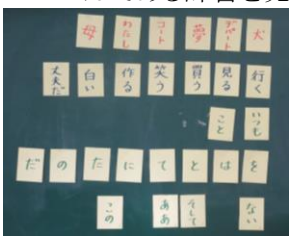
## 国語で遊ぼう！（教室では・・・）

先日の小・中学部の授業です。お子さんの年齢や日本語力に合わせて、ご一緒にどうぞ。

◆小5では、複合動詞を中心とした、複合語の勉強。「飛ぶ⇒飛び+〇〇」の言葉を例文を基にみんなで見つけていました。「△△君が、プールに『飛び（ ）』」の例文では『飛び散る』などという物騒な発言もありましたが、さて、いくつ見つけられるでしょうか。



◆小4では「まちがえやすい漢字」。『早い』と『速い』さてどう違うのでしょうか。「傷の治りがハヤい」はどっち？「かんしん」を漢字で書くと？子どもたちはみな競い合って発言していました。『関心』を説明するのにはやや苦戦していましたが、それでもやっぱり頼りになったのは『国語辞典』。みんなで辞典を囲んで納得していたようです。余談ですが、プリンスン小学部の教室で、付箋のたくさん挟んである辞書を発見。みんな良い勉強をしていますね。



◆中1では、左の言葉を使って、文を作る学習。すべての言葉を使って3つの文をつくるというミッション。簡単そうで、これもなかなか難しいですね。あわてると「犬がコートを買ってしまった」結末にもなりかねません。

## 35周年・・・その3

1980年4月6日の開校当時は、幼稚部24名、小1が9名、小3が5名、小4が1名、そしてJASLが8名というスタートでした。当時のことを小野咲子元運営部長の『25年史』からも少し引用します。『・・・1989年に派遣教員の先生をお迎えするまでの9年は、日本語学校には事務所もなく、一人が何役もこなすような手作りの学校でした。手書きの書類やお知らせ類、週日は各自家庭で行われる仕事、子どもが寝のを待って始められる事務処理、時には子どもたちも動員して行われた教科書・教材運び、ことに当たっては重ねられる真剣な話し合い等々、無我夢中の日々でした。1989年に派遣の先生をお迎えしてからは、事務所も構え本格的な学校づくりが始まりました。しかし、限られた環境にあって、先生を確保することがいつも難題でした。子どもたちにとってクラスが開かれることは必須のことであり、毎年クラスを開くため背水の陣で先生探しが行われました。また、日頃思いをはせることもない校舎の確保にも、大きな努力が払われました。・・・』今から10年前に書かれたこの『25年史』を、私は何度も読み返しています。丁寧に、誠実に記されたプリンスン日本語学校25年の

素晴らしい歴史です。何度読んでみても胸を打たれます。今回ここに引用させていただいているものは、創立当初の話です。大変なご苦勞をされて本校が作られてきたことには、ただただ頭の下がる思いです。一方、これは本当に過去の記録や昔のことなのだろうかという思いも湧いてきます。現在、創立時の何倍もの規模の学校となり、手書の書類やお知らせ類がワープロとなり、紙ベースであったものが電子配信され、子どもたちが教科書を運ぶこともなくなり、いつの間にか教科書が手元に届いているように思える今。先生と呼ばれる人たちも30名を超え、いつでも当たり前のようにクラスが開かれているように思える日々。しかし、私には、例え規模は変わっても補習校がやはり補習校であることには、少しも変わることがないように思えてなりません。（次週に続く）

## 帰国後のご報告を

年度末となり、帰国されるご家庭もおありです。お子さんたちにとっては、少なからぬ不安を抱いての帰国となるでしょうが、現地校との両立に努力されたことが真の力となって、帰国後の活躍につながっていくことを信じています。今年度から、本校教育の向上と、今後帰国される方の参考とすべく、帰国後の適応状況の書類をお願いしています。受け入れ校用には教科書給与証明等と一緒にお願いいたします。保護者の皆様には、メールでの添付とさせていただきます、ご記入後、本校宛メールでのご返信をお願いいたします。一時帰国につきましても、受け入れ校にも同様の書類をお持ちいただくことをお願いすることになりますが、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

## 一月のセミファイナリスト 田中杏夏さん(小学部四年)

新俳句グランプリ事務局からお便りをいただきました。小学部4年の田中杏夏さんが、1月のセミファイナリストに選ばれました。セミファイナリストといってもわかりにくいのですが、事務局からの説明では「毎月7句がセミファイナリストとして選ばれ、1月から10月までの10か月、計70句から金・銀・銅賞受賞者が選ばれる」ことになるそうです。おめでとう、田中杏夏さん。作品は来週号の「週刊NY生活」に掲載されることとなります。新俳句は季語等の制約がなく、自由に五七五の作品作りを楽しんでもらいたいという趣旨のものです。今は年度末で、学校の授業時間内での取り組みは難しいところですが、皆さんもぜひ、応募の機会を作って、俳句作りを楽しんでみてください。

